現代民話に用いられる数詞の考察
−女子高生の語りから見えてくる特徴−

清　海　節　子

1.　はじめに

本稿は，女子高生の語りに用いられる数詞[1)]の用法を考察する。取り上げる話は，現代民話または，都市伝説とも呼ばれ，噂話としての「世間話」とみなされている。実際の語りで，いかに効果的に数詞が使われているかについて，データを注意深く観察し，その役割を検討していく。稲田・稲田（編）（2010:240）によると，世間話は，口承で伝えられる散文形式の物語である。また世間話は，昔話と伝説とは区別されている。その理由は，昔話が虚構性や様式性を重視するからであり，伝説は歴史的事実や共同体の共有性を重視するからである。一方，世間話は，一定の語り口があるわけではなく，語り手の身近で起きた出来事が自由に語られるのである。清海(2016b)では，女子高生の不思議な話(久保 1997)の中で，「学校の怪談」として分類される話に限定して，数詞の種類に注目した。その際，延べ数には関係なく検討したため，数詞の繰り返しなど実際の用法については，データから４話のみ検証するに留まった。そこで，本研究では，同資料全体の話を対象にして，数詞が如何に表現されているかについて，数詞の用法を詳細に観察し，その特徴を明らかにしていく。

清海(2015,2016a)[2)]では，民話に於ける数詞の種類と役割を考察し，複数の「数詞」が使用される方法はランダムでなく，秩序があり，語り手に於ける数詞の用法には規則性がある程度見出された。従って，民話の中では，数詞が伝承機能の一端を担うことが推測された。さらに，清海(2016b)では，いわゆる「学校の怪談」として世間に受け入れられている現代の「世間話」の中に現れる数詞の種類と頻度を調査し，民話に於ける数詞の特徴（清海 2015)と比較した。世間話の中で，「学校の怪談」というジャンルを確立したのは，松谷(1987)と常光(1993)であると考えられている。しかし，高木(2005)と山田(2005)から，「学校の怪談」は，定義がされていないだけでなく，十分な口承資料に欠けていると批判されている。そこで，清海(2016b)では，「学校の怪談」を「学校という場で発生する怪奇な話」と定義し，久保(1997)が集めた女子高生の語る不思議な話を資料として，数詞に関して調査した。久保(1997)を選んだ理由は，口承性と呼ぶべき性質が話の中に認められると判断したからである。検討した結果から，「学校の怪談」に出現する数詞の傾向が，民話の数詞に類似していることが明らかになった。従って，「学校の怪談」に於いても，民話と同様に，数詞が伝承機能としての役割を果たしているのではないかと提案した。

次の２節では，久保(1997)の資料の中で，「学校の怪談」として分類される４話を紹介し，数詞の用法を確認する。３節で同資料の他の不思議な話を参考に，数詞が如何に効果的に用いられているかを観察する。そのために，「学校の怪談」以外で14分類された場所や事物に関する話の中，数詞が最も多く用いられている話を１話ずつ調査し，数詞の種類，数詞の現れる順，助数詞も考慮に入れて，その役割を考察する。さらに４節では，日本語の[数詞+助数詞]が，英語ではいかに表現されているかについて，対訳本で調査し違いを確認する。また，北原白秋が英語のマザーグースを訳したが，その中の訳詞で，数詞に関わる修正をした「胡桃」に言及する。最後の５節では結論を述べる。

2.　久保(1997)

久保(1997)には，函館大妻高校の女子高生が

1992年から1996年までに語った不思議な話が収められている。久保が教え子たちから話を聞いて，メモを取り，それを函館大妻高等学校の研究集録『大妻』に「高校生が語る現代民話」として掲載していた話から成立している。毎年一回およそ200名の学生を対象に収集した2000話から1200話を選び，久保が分類整理し，「家」「学校」「病院・宿」「トイレ」「車」「道・トンネル」「山と海」「墓」「死」「霊」「怪」「写真・電話」「夢」「動植物」「ことば」の15の場所や事物に分類されている。2.1では，清海(2016b)に基づき，「学校の怪談」の数詞の傾向を確認し，2.2では，「学校」の項に分類されている４話を紹介する。

2.1　清海(2016b)

久保(1997:25-50)が「学校」という分類で162の話を扱っている話は，いわゆる「学校の怪談」として捉えることができる内容である。清海(2016b)では，この分類の話の中の数詞を調査し，162話の中，64.2%に相当する104話に数詞が使われていることが分かった。出現する頻度が一番高い数詞は「1」で67話であり，数詞を含む話（104話）の64.4%になる。以下，「2」36話，「3」(24話)，「10」(9話)，「4」(8話)，「6」(8話)，「5」(6話)，「7」(6話)，「12」(5話)，「8」(3話)「15」(2話)，「30」(2話)　の順になる。1話だけに使われている数詞は「9」「13」「14」「20」「45」「60」である。数詞を頻度順に並べると次のようになる：「1,2,3,10,4,6,5-7,12,8,15-30,9-13-14-20-45-60」（同頻度は［-］で繋げている)。これらを表で示すと表１のようになる。

表１：「学校の怪談」104話中の数詞の頻度の順位（清海 2016b:42）

頻度	1位 64.4%	2位 34.6%	3位 23.1%	4位 8.7%	5位 7.7%	6位 5.8%
数詞	**1**	**2**	**3**	**10**	**4,6**	**5,7**

頻度	7位 4.8%	8位 2.9%	9位 2.0%	10位 1.0%
数詞	**12**	**8**	**15,30**	**9,13,14,20,45,60**

表１からわかるように，データで見つかった数詞は，18種類である。一桁の数詞は「1」から「9」まで 9種類すべてが用いられ，頻度は「1」が最も高く，「9」が最も低い。二桁は「10」から「60」の間の 9種で，「10」の頻度が最も高いことが観察された。

以下，検討する話の中で，考慮に入れるべき数詞とその前後に付随する部分（多くは助数詞）には下線を施している。本稿では，助数詞を「モノやコトの性質，また，時間，回数，長さ，重量などの単位を表す接辞」[3]と定義する。久保(1997)のテキストでは，数字が全て漢字で書かれ，読みにくい場合があるので，「一〇」と記されている場合は，「十」または「10」，「一一」と記されている場合は，「十一」または「11」と書き直すなど，読みやすくした。また，基本的に，二桁以上の数字は，アラビア数字に改めた。数詞に，「一人もいない」など，数詞が否定の意味に使われている時は，[neg]を付け加えた。また，数詞を含む表現ではあっても，具体的に数を意味しない場合（例：一緒，一体）は，考慮に入れないことにした。

2.2　「学校の怪談」4話

次に「学校」の項に分類されている話で，清海(2016b)では紙面上の都合で取り上げなかった以下の４話を検討して，「学校の怪談」の数詞の傾向を再確認する。

(1)　『不思議な廊下』(久保 1997:37)

私の学校の廊下の話です。たくさんの人が試していますが，みんな「やっぱり違う」と言います。それは，廊下の行きと帰りの歩数が違うのです。つま先とかかと，つま先とかかと……というように，くっつけてはかりながら歩きます。例えば<u>50歩</u>くらいとします。そうすると帰りが<u>60歩</u>くらいあります。これはこの学校がすごく荒れていた時代にすごくいじめに遭って[4]いた人が自殺したと言われている，家庭科準備室のところから<u>第一</u>職員室の前までなのです。いくら違うと言っても，<u>五歩</u>くらいならウソだと思いますが，<u>10～15歩</u>も

違うのです。これは卒業した今でも不思議です。ちなみに，家庭準備室は，廊下の一番端にあります。

(1)は，６種類（「1」「5」「10」「15」「50」「60」）の数が，「50-60-1-5-10-15-1」の順で現れている。「1」以外は，すべて「-歩」という助数詞に伴われている。「1」は，「第一」と「一番」である。一桁で最も頻度が高い「1」が用いられているのは，当然であるだろう。それ以外の数，「5」「10」「15」「50」「60」は，「5」の倍数であり，「15」と「50」は，「5」が含まれている。また「60」は，「50」に「10」を足した数である。上で指摘されたように「10」は二桁の中で頻度が最も高いので，暗に関連すると考えられる。

(2) 『白い服の女』(久保　1997:50)

私が吹奏楽部に入部していた頃の話である。高二の春，楽器の講習で先輩と二人で遺愛高校へ行った，その帰りの事です。先輩は先に帰り，私は大妻学校へ行って楽器を置きに音楽室へ行きました。ふっと友達が「五時近くなると初代校長と神田マスコ先生が見回りに来るんだよ」と言っていたことが頭をよぎりました。私は楽器をピアノの下に置き，音楽室から玄関へ向かって走り出しました。私が第二講堂の一番最後の戸あたりについた時，ゴム底のスリッパの様な音が「バタバタ」と聞こえました。私はものに狂った様に玄関へ走り出しました。あれは私の足音かお化けの足音か，単に気のせいだったのか。

高一の夏休み，吹奏楽部の合宿が同窓会館で行われました。予想通り，二人の先輩が白い服を着た女の上半身を見て，もう一人の先輩は下半身を見たと言う。同じ一年生がオレンジ色の光の線があっていた人がいたと言う。いったいなんだったのだろう。

(2)には，「1」「2」「5」の３種の数詞が「2-2-5-2-1-1-2-1-1」の順に現れる。「1」と「2」はそれぞれ４回繰り返されている。「1」は，「一番」「高一」「一人」「一年生」と助数詞が異なっている。「2」は，「高二」「二人」「第二講堂」「二人」として表現され，「1」の助数詞と半分以上同じである。前半は「2」が多く，「1」は後半に使われている。

さて，次の二つの話は，１種類の数詞が複数回繰り返されている。(3)は「2」が５回，(4)は「3」が４回繰り返されている。

(3) 『青い光』(久保　1997:44)

友達から聞いた話です。合宿中にあったことです。夜二時位に女の子二人がトイレに行きました。回りは，薄暗くあまり見えません。トイレの戸をあけようとした時です。職員室のところに飾ってあった額が落ちてきました。体育館に行くところから青い光が出て女の子二人を突き刺しました。「助けてくれ〜」と男の人の声がし，血まみれになった男の人たちが二人におそいかかってきました。二人は気を失い朝まで倒れていたそうです。

(4) 『いじめっ子』(久保　1997:39)

友達に聞いた話です。クラスの中にいじめられっ子がいて，ある時三人がその子をいじめていました。その子を物置にとじ込めた三人は次の日その物置に行って見ると，いじめられっ子の子は首つりをして死んでいました。でもなぜかその子は学校に来ていました。そしてその次も次の日も同じようにしたのにその子は学校に来たそうです。死体が見つかり調べてみると，三日前に死んだ体だったそうです。その三人は同じように死んでいったそうです。

上の(3)は「2-2-2-2-2」の内，「二人」が４回繰り返され，「女の子」の代名詞としての役割も果たしている。(4)は「3-3-3-3」の内，「三人」が３回用いられている。(3)では，最初の「夜二時」は「2」の発音が[ni-dzi](発音記号の下線部分)で，「二人」([ɸuta-ri])と異なるが，反復により，数の概念としての「2」が強調されていると理解すべきであろう。同様に，(4)は，具体的

に誰なのか言われずに「三人」が代名詞として使われているが，「三日」([mik-ka])の「三」は「三人」([san-niN])とは「3」(発音記号の下線の部分）の発音が異なるが，繰り返されることで，概念としての「3」の印象を深め，伝承のために機能していると思われる。以上のように，「学校の怪談」では，数詞が繰り返し使われていることに注目すべきであろう。

次の節では，「家」「病院・宿」「トイレ」「車」「道・トンネル」「山と海」「墓」「死」「霊」「怪」「写真・電話」「夢」「動植物」「ことば」の14の場所や事物に分類されている話の中，数詞が多く用いられている話を各分類で１話ずつ取り上げ，数詞の種類，数詞の現れる順，助数詞も考慮に入れて，その役割を考察する。

3.　女子高生の語る不思議な話：14話の数詞

以下に取り上げる話では，最初に，分類名とそれに属する話の総数がカッコ内に示されている。各分類の中で，数詞が最も多く使われている話を１話ずつ選び，そのタイトルを二重カッコの中に入れた。多数の数詞が用いられている話を観察することで，数詞と伝承機能との関連性が明確にされることが期待される。最初にテキストを紹介した後，数詞の種類，現れる順，また助数詞について検討していく。

3.1　14分類の話

(5)「家」(77話)『お化け屋敷』(久保　1997:14-15)

ある街の道沿いにお化け屋敷があるというので，男三人で見に行ったそうです。その日は，何も起こらなかったので，次の日，霊感のある女の子を連れていきました。その子は中庭に入ったとたん動かなくなり，理由を聞くと，木の横にお爺さんがいると……。その日はそれ以上行けないと言うので，そのまま帰ることにしたそうです。その次の日，男三人でもう一度行ったそうです。そして家に入って中ほどまで来ると，仲間の一人が「懐中電灯を向けないでそのまま上を見ろ」と言ったそうです。他の二人がそおっと顔を上げると，天井の隅に丸顔のお爺さんの顔が浮いていて，目をパッと見開き，ヌーッと首を突き出し男たちを見下ろしていたそうです。その後，この三人はどうやってにげてきたかわからなかったくらい，必死で逃げ出したそうです。それから，二，三日後，三人の中の一人が交通事後にあい，全身を60数針縫い，30日間意識不明という重症だったそうです。その他にも，このお化け屋敷に遊びに行き，帰りに事故死するという事件もあったそうです。

この話は，「1」「2」「3」「30」「60」の５種類の数が延べ12回，「3-3-1-1-2-3-2-3-3-1-60-30」の順に現れる。「1」は３回，「2」は２回，「3」は５回繰り返されている。二桁は「30」とその倍数の「60」である。「1」の助数詞は，「一人」「一度」，「2」は「二人」「二日」，「3」は，「三日」と，４回繰り返される「三人」である。助数詞「−人」が６度用いられ，代名詞の働きもしている。別の角度から見ると，一桁は，「1,2,3」という連続した数詞が使われ，２種の二桁は「30,60」で，一方が他方の倍数となっていることが分かる。

(6)「病院・宿」(42話)『生徒が消えた』(久保　1997:61)

この話は友達から聞いたものです。もうずっと昔の話です。一人の先生と11人の生徒が旅にでかけました。しかし途中で嵐にあい，予定していなかった宿に泊まるはめになったのです。やれやれと思い安心したのもつかの間，その村を抜ける一本の道が崩れてしまったのです。しかたないのでその宿に10日間泊まることになりました。何もないまま三日が過ぎました。しかし，四日，五日と日にちが経つにつれて，一人また一人と生徒が消えていったのです。不思議に思った生徒が生徒に言っても「帰ったんだろう」とあいまいな言葉でごまかすのです。そして最後の夜には，もう三人しか残っていませんでした。怖がりながらも，三人は眠りにつきました。ところが，三時ごろ，一人が，ズーッズズーッという音で目覚めたところ，一人足りないのです。その人はもう一人を起こし

て，その音をたどっていくと，なんと，先生が生徒の足を引っ張って歩いているのです。そして外にいくと生徒を頭からムシャムシャと食べていたのです。先生はこっちに気づくと血だらけの口で「見たなっ」と叫んだのです。

この話では，「1」「3」「4」「5」「10」「11」の６種類の数が延べ15回用いられ，「1-11-1-10-3-4-5-1-1-3-3-3-1-1-1」の順に現れている。「1」が７回，「3」が４回繰り返されているが，他の数は一度だけ用いられている。二桁は「10」と次の数の「11」である。「1」の助数詞は，「−人」が６回で「−本」が一回，「3」は，「−人」が２回で，「−日」と「−時」がそれぞれ一回である。「4」「5」「10」の助数詞は「−日」であり，「11」は「−人」である。以上から特徴として言えるのは，一桁は４種類，延べ13回用いられているが，「1」が半数回以上現れている点である。また，二桁は，隣接した２種類（「10」「11」）であること，さらに，助数詞は三分の二（15中10）が「−人」であり，人数を表現する目的で，数詞が多用されていることが分かる。

(7)「トイレ」(68話)『トイレの花子さん』(久保 1997:74)

小学校三年生の頃「トイレの花子さん」のうわさがあって，左右から三番目のトイレには絶対に入らないというのがはやった。別に私の学校のトイレに出たという話は聞いた事がなかった。それにこんな話がありました。どこの都道府県かはわかりませんが，どこかの町の三丁目に花子さんという女の子がいたんだそうです。その子がなんの原因かは知りませんが死んでしまったのです。そして何故だか知りませんが三番目のトイレに立っているというのです。ある日，A さんが夜に学校の三番目のトイレに入ったんだそうです。そしたら，天井の方から「赤いちゃんちゃんこ着せましょうか？」という声が聞こえたそうです。A さんは，「うん」と言ったら全身血だらけになって死んでしまったそうです。この話は友達づてに私も聞きました。それから「二丁目の太郎さん」という話もでてきて，左右二番目のトイレも使えなくなってしまいました。太郎さんの由来は全然知りません。「三丁目の花子さん，赤白黄色，一，二，三」ってトイレで言うのもはやってました。ついでですが現在の小学生の新しいうわさは，夜に「三本足のリカちゃん人形」が出るというのだそうです。由来はわかりません。

この話に，数詞が延べ12回現れているが，「1」「2」「3」の３種類のみが「3-3-3-3-3-2-2-3-1-2-3-3」の順に用いられている。「1」は１回のみ，「2」が３回であり，「3」が圧倒的に多く８回繰り返されている。助数詞に注目すると，４種あり，「−番」が４回，「−丁目」が３回，「−年」と「−本」が１回で，さらに助数詞なしの「1,2,3」が話の最後の方にある。興味深い点は，「3」に関して，これらすべての助数詞と助数詞なしで現れていることである。

(8)「車」(88話)『車の事故』(久保 1997:92-93)

友人から聞いた話です。ある日，A 子は五人で，車で五時間位にあるキャンプ場に遊びに行こうとしていました。A子は家を出て B君の家で待ち合わせなので急いで向かいました。行く途中，A 子は車にはねられそうになりました。とにかく B の家につきました。B のお父さんを入れ，五人はそろいました。ワゴンに乗りキャンプ場に向かいました。その時前から大型トラックが来て正面衝突しました。A子が気づくと，友だちみんな無事でしたが B のお父さんがいませんでした。四人で町を歩いていてもめちゃくちゃになった車を見にくる人もいなければ，そこらへんを歩いている人は誰一人いませんでした。四人は不思議に思い，町をいろいろ廻ったけれど誰一人やっぱりいませんでした。その時一枚の新聞が道に落ちていました。四人で見ると「ワゴン，大型トラック正面衝突，一人軽傷，三人重症」と載っていました。みんなは自分たちのことだとすぐわかりました。ふっとその時 C子がいなくなったのです。みんなで捜し

ても見つかりません。また一枚の新聞が……。みるとさっきの新聞の続きのようで「一人は完治した。二人意識不明，一人死亡（C子）」と……。その時，一人またいなくなりました。B と A 子が残りました。あと新聞で「残っている人は一人」新聞にとうとう三人死亡と載りました。B もいなくなりました。その時 A子は暗闇にいなくなりました。誰もいない町には一枚の新聞。車にはねられ死亡（A子）と書いてありました。A子はキャンプ場に向かう前，車にはねられていたのです。

上の話は，最初 5人いたが，次々と交通事故で亡くなり，最後は誰もいなくなってしまう話である。内容から，必然的に数詞は多く使われている。実際「1」「2」「3」「4」「5」の５種類の数が「5-5-5-4-1(neg)-4-1(neg)-1-1-3-1-1-2-1-1-1-3-1-1」の順で延べ19回現れている。「1」は11回，「2」は１回，「3」と「4」はともに２回，「5」は３回，繰り返され，「1」が他の数詞を引き離して多用されていることが明らかである。助数詞に関して，最初の「5時間」以外，「1枚」が話の後半同じ程度の間隔をあけ，３回現れ，残りの数詞には「−人」が15回用いられている。

数詞の現れる順だけを観察すると，この話の中で最も高い数である「5」は，最初に「5人」「5時間」と続けて，またしばらくして「5人」が現れ，「5」がうまく強調されている。前半の終わりに，「誰一人いません…」という表現で「一人」が２回否定として使用され，同様に，落ちてきた新聞は，全てではないが，「一枚の新聞」と３回表現されている。

換言すると，この話は「5」で始まるが，少し話が進むと「1」を強調しはじめることで，人数が減っていくという恐怖を強調する役割を果たしていると考えられる。不思議な現象として伝える時，語り手は，数詞を効果的に利用することで，聞き手の恐怖心を高めることを期待しているのではないだろうか。

(9)「道・トンネル」（67話）『母の霊感』（久保1997:99）

私の兄は今までに二度死にかけています。一度目は兄が六歳，私が三歳ごろのことです。私と二人のいとこは，兄のむかいの歩道にいました。早く家に帰りたかったのか私は兄に「早く渡ってきてよ」といって手招きしたそうです。兄は，道路を渡ろうとしました。すると車がきてはねられ，兄は宙に浮きうしろからきた車との間にはさまれたんです。私はその時のことははっきりとは覚えていなくて兄が倒れているところだけしか思いだせません。しかし兄はかすり傷ですみました。

そして二度目は今年の四月十九日のことです。兄は自転車に載っていて，一時停止のところで止まると，横から車がきて兄とぶつかりました。しかし兄はけがは何一つなく今でも元気に生きています。私の母は兄が二度目の事故にあった日に兄にこんなことを言っていました。「今日は夢見が悪いからバスで学校に行ったら？」まさにその日，兄は交通事故にあったのです。

実は母は私の祖父の死んだ日の朝，私に「なにか線香の匂いしない？」と聞いてきたので，「しないよ」と私が言うと「そろそろ，お祖父ちゃんがあぶないよ，覚悟しときなさい」と言われました。そして学校で三時間目の英語の時間，先生が私のところにきて，「お祖父ちゃんが危篤状態だ」と言いにきたのです。ちなみに母は私のいとこが死んだ日，近所のおばさんが死んだ日，お父さんがけがをした日のことなど，当てています。

この話は，兄が２度死にそうになかったこと，また最後に，母親に予知能力があることに触れている。数詞は延べ11回現れていて「1」「2」「3」「4」「6」「19」の 6種類である。「2-1-6-3-2-2-4-19-1-1(neg)-2-3」の順に用いられている。「1」は３回，「2」が４回であり，「3」が２回繰り返されている。助数詞に注目すると，５種の内，「−度」が４回，「−歳」が２回で，「−人」「−時間」「−つ」「−月」「−日」が１回ずつある。「4月19日」では日付として「死」と「苦」を連想させる数詞

が用いられている。兄が２度死にかけた内容なので，「2」が一番多くあることは当然であるが，最後の部分で母親の予知能力に触れると，特定する必然もないのに，「三時間目の英語の時間」と時間を「3」にしている。一体なぜなのだろうか。想像ではあるが，語り手は，数詞を利用することが，話の筋に変化があることを暗に示す効果があると考えていたということである。つまり，「2」を連想させる兄の話の後，語り手は「3」という数詞に変えることで，母親の話に移ったシグナルとしての効果を狙ったのではないだろうか。

(10)「山と海」(79話)『リレー』(久保　1997:121)

友達から聞いた話です。冬のある日，山登りをしていた大学生四人が，吹雪のため道に迷ってしまいました。厳しい寒さのために一人の人が凍死してしまったそうです。あとの三人は運が良く山小屋を見つけ中に入る事にしました。でも凍死をした一人はどうしたらいいかという話になりました。しかし仲の良かった友達だったので，一緒に中に入れる事にしました。中には燃やせるような木もなく，ほんの少し寒さをしのげたくらいで，このままでは残りの人も死んでしまいます。そこで三人は端から端へと壁づたいにリレーをする事にしました。一人は欠けた一人のため二人分走らなければいけません。暗やみで何も見えなかったのですが端から端へと何周も何周もくり返し走りました。次の日の朝，自分たちを探しにきた人に助けられたのですが，二人分走った人が自分は一人分しか走っていない事を二人に告げました。暗やみでわからなかったのではないかと思うのですが，一人分のところで誰かがいたというのです。それはきっと，凍死した友達が自分達を助けてくれたのだと生き残った三人は，思ったそうです。

この話は，連続する「1」「2」「3」「4」という４種類の数詞が延べ13回使われて，「4-1-3-1-3-1-1-2-2-1-2-1-3」の順に現れている。「1」は６回，「2」は3回，「3」は３回，繰り返されている。「4」は１回のみである。話の筋は，山で４人の内一人が凍死して，残りの３人は，リレーをして体を温めて生き残れたが，二人分走ったと思われた者は一人分しか走らなかったことが後で分かり，凍死した友人がその分を走ってくれて彼らを助けたらしいという話である。最初に「死」を連想させる「4」が一度だけ登場し，最後の文は「３人」で終わり，数詞を用いて表現されることで，要旨が分かりやすくなっている。最初の「4」と最後の「3」の間は，後半の部分を除いて，「2」か「3」が交互に「1」の後に現れている。助数詞は，全て「−人」であるが，その内「−人分」が4回あり，「2人分」３回と「1人分」が１回である。その他の数詞は「4, 1, 3, 1, 3, 1, 1, 2, 3」となるが，その内，純粋に数量を表すのは，最初の「4」と「1」だけである。つまり，大学生が４人いて，そのうち一人が凍死したという情報である。残りの「3, 1, 3, 1, 1, 2, 3」は，「１人は」「2人に」「3人は」と表現されているが，「…人の学生」の意味で，「の学生」部分が，省略されていると解釈できる。つまり数量を表すだけでなく代名詞としての役割を果たしていると言える。このように，「数詞＋助数詞」が代名詞としての働きをするのは日本語の特徴で，英語と比較してみると明確になるだろう。[5)]

(11)「墓」(60話)『かくれんぼ』(久保　1997:134)

去年の夏に友達から聞いた話です。友達の男友達が車を運転し，途中で女の人を乗せたそうです。そしたら女の人が，「お墓でかくれんぼをしよう」と言いだして，かくれんぼをすることになって，まず女の人と男の人一人が隠れて，もう一人の男の人が鬼になって，二人を探しました。まず男の人が見つかって，二人で女の人を捜したんだけど，見つからないんだって。でも女の人一人残して帰るわけにもいかないから，もう一回捜すって言って焼場の方まで行ったんだって。そしたら女の人がいたんだけど，その人は焼場の二階から男の人に手を振ってたの。でもそこはカギがかかってて中に入れなくなっているので，男の子の人達は，「これって，もしかして……」と思って怖くなっ

て逃げてきたんだって。

この話には，数詞が延べ７回現れているが，「1」「2」の２種類のみで「1-1-2-2-1-1-2」の順に用いられている。「1」は ４回で「2」は ３回である。助数詞に注目すると，３種で，「−人」が５回，「−回」と「−階」１回ずつである。この話には，一人の女性と二人の男性が登場人物であるが，初めに男性が二人であることは述べられていない。「二人」が二回使われているが，それぞれ「女性１人＋男性１人」と「男性２人」を意味するので，聴き手には分かりにくくなっている。この話では，女性が幽霊であるとははっきり述べられていないが，墓との近接性からあの世からきたという含みがある。そこで，男性と女性とは，生と死を象徴していると考えて妥当であろう。つまり，「生−死」「男性−女性」の対立が，「2−1」という数詞の対立で強化されていると捉えられる。

(12)「死」(42話)『死の知らせ』(久保，1997:156-157)

私は今までに祖父二人，祖母一人のお葬式に出ました。まずは祖父一人目が亡くなった時のことです。なんだか体調が悪く，母に具合悪いと言って熱を計ったら38度あり急に変だねなどと言ってたら「お祖父ちゃん亡くなったよ」って言われました。

次に祖母が亡くなった時です。こと時はたまたま風邪ぎみだったんですけど，やっぱり38度の熱が出て「お祖母ちゃん亡くなったって」と言われました。この時，母は車の免許を取ったばかりだったんですが，いつもなら汽車で行っているのに，その時はなんだか車で言った方がいいと思ったらしく行ったらちょうど祖母の死に目に会えたそうです。「もしあの時汽車で行ってたら，死に目に会えなかったよ」と言ってました。

最後に二人目の祖父が亡くなった時の話です。私はその日，バスケットの遠征で北見市に行く予定でした。朝五時に友達と待ち合わせしていたので四時頃起きたのです。朝起きる前に私は二度夜中に目を覚ましたことに気づいてなんだかまだ眠いと思ってふとんの中に入ってたんです。もうそろそろ起きなきゃと思ってフット体を起こしたらすごい吐き気がして，母に「あんた顔がまっさお」って言われ，自分でも体が重たくて超吐き気がして「いままでにない顔色だ」と母に言われました。具合が悪いだけで遠征なんて休めないと思って，午前五時ぎりぎりに待ち合わせ場所に行こうとしたら，電話がなって「祖父が午前三時に亡くなった」と電話が入りました。それを聞いて「あっそういえば三時頃，私目覚めた」って言ってみんなびっくりしてました。このまま遠征に行ってたらどうなってたんだろうといまでも思います。すべてお棺に入れて焼いた後に熱は下がりました。

この話では，死の予知ができることを伝えるために，数詞を工夫して使っている。延べ12の数詞が見つけられる。「1」「2」「3」「4」「5」「38」の6種類が「2-1-1-38-38-2-5-4-2-5-3-3」の順に用いられている。「1」は２回，「2」が３回であり，「3」と「38」が２回繰り返されている。「4」と「5」は一度だけである。助数詞に注目すると，３種だけ見つかり，「−人」が４回，「−時」が５回，「−度」は，「38度」(温度の単位) と「二度」(回数を表す) で３回使われている。数詞の分布では，前半が「1」「2」「38」だけで，後半は近接の数詞「2」「3」「4」「5」の４種が次のように，順不同で現れている：「二人目の祖父」「朝五時に」「四時頃起きた」「二度夜中に」「午前五時ぎりぎり」「祖父が午前三時に亡くなった」「三時頃，私目覚めた」。

(13)「霊」(76話)『三代続けて呪われた一二歳の誕生日』(久保　1997:180-181)

ある旅館のお話です。話の始まりは，80年も前にさかのぼります。そこには，五人の従業員がいたそうで，うち一人は，子供連れだったそうです。その子供は，体が弱く病気がちで，母親はいつもその子の世話にかかりっきりでした。ある日，その子供は大変なことに高熱を出してしまったので

す。しかし，旅館の主人は子供にかかりっきりの母親のおかげで旅館の仕事がはかどっていなかったために，「医者にかけるお金はないよ」と放ったらかしにしたそうです。やがて，その子は12歳の誕生日に亡くなってしまいました。母親は「三代たたってやる」と手紙を残して自殺してしまったそうです。旅館の主人の息子の12歳の誕生日，息子は井戸に落ち，大ケガをして，一生[6]車イスの生活になってしまいました。そのまた息子の12歳の誕生日，旅館の従業員がうっかり台所の火を消し忘れ，火事になり，二代目の息子は頭部から首，背中にかけてやけどをしたそうです。その人の娘，三代目の12歳の誕生日，その日何もなかったようにみえたのに，娘さんは急に目の色が変わり，娘は母親をふりとばし，家の前にとびだし観光バスにひかれてしまい，手や足を何針も縫う大ケガをしたということでした。

この話には，延べ11の数詞が使われている。「1」「2」「3」「5」「12」「80」の６種類の数が「80-5-1-12-3-12-1-12-2-3-12」の順に現れている。タイトルにもあるように，呪いのために，旅館の主人の子供が三代に渡って，12歳の誕生日に不吉なことが起きた話である。従って，重要な役割の数である「12」が４回，「3」は「1」と共に２回繰り返されているが，「2」「5」「80」は一度だけ用いられている。「12」の助数詞は全て「−歳」で４回繰り返されている。「−人」が２回で，「−代」が3回，「−年」が1回である。この話で使われている数詞に関して，「1」「2」「3」「5」が使われているのに，なぜ死を連想させる不吉な「4」が使われていないのかという疑問が生じる。

(14)「怪」(117話)『一人部屋』(久保　1997:212)

私が金縛りにかかりはじめたのは，去年の三月に家を引っ越してきた時のことです。引っ越す前は，私と妹の二人で寝ていました。その時まで，金縛りには一度もかかったことはありませんでした。去年引っ越してきてから，一人部屋になりましたが，いつごろから金縛りにかかりはじめたのかはわからないけど，夜寝るのが怖いのです。最初のうちは，一か月おきぐらいに，金縛りにかかっていたのが，この頃は，一週間に一回，なるのが多くなってきています。二日続けてなったこともあります。寝て一時間しか経っていないのに，金縛りにかかったこともあるし，寝て五分しか経ってないのに，金縛りにかかったこともあります。金縛りにかかっている時は両手で私の肩を押しているのがわかると，急いでやっと起き上がり，怖くてすぐ電気をつけます。今までは，肩を押されるだけでしたが，手も押される様になってきました。昼間一時間くらい寝た時に，肩を押される状態でしたが，突然，若い男の人の声で「ああー」という声が聞こえました。その時，とても怖かったです。急に起き上がろうとしても，おされるままで五秒から10秒くらいでやっとおきあがります。金縛りにかかっているのは，お祖父ちゃんとお祖母ちゃんのお墓参りに行っていないのが原因かなぁっておもいました。来年はお墓参りに行きたいと思います。

この話は，「1」「2」「3」「5」「10」の５種類の数が，延べ13回使われている。「1」は7回，「2」と「5」は２回ずつ，「3」と「10」は一度だけで，現れる順は，「3-2-1-1-1-1-1-2-1-5-1-5-10」である。「1」は７回，「2」は２回，「3」は１回，「5」は２回，「10」は１回用いられている。また助数詞は10種類もあるが，ほとんどが時間に関係している：「−月」「−人」「−度」「−ヶ月」「−週間」「−回」「−日」「−時間」「−分」「−秒」。これらの中で，「−人」「−時間」「−秒」は２回使われているが，他の７種は，一度だけしか出てこない。具体的な時間には「1」「5」「10」が，「1ヶ月おき」「一週間に一回」「寝て一時間」「寝て5分」「昼間一時間」「5秒から10秒」と表現され，「1」と「5」と「5」の倍数が用いられていることは興味深い。

(15)「写真・電話」(37話)『怪奇ゲーム三題』(久保　1997:222)

これは一人でできる怪奇ゲームです。午前二時

に電話ボックスの0を444回押すと，次の13日の金曜日まで自分の家が見つからないそうです。夜中二時ちょうどに鏡を見ると幽体離脱ができる。でも夜明けまでに自分の肉体に戻らないと，一生そのままの状態で暮らすことになってしまうそうです。四人でやるゲームです。一つのテーブルのまわりに四人で手をつないで，テーブルを囲みます。テーブルの上にローソクを一本ともし，一人ずつこわい話をして，全員が話し終えたころで誰かの後ろに霊が立っていたらその人は死期が近いそうです。

この話は長くない割に，数詞の種類が多く「0」「1」「2」「4」「13」「444」の６種類である。数詞は，延べ12回現れ「1-2-0-444-13-2-1-4-1-4-1-1」の順に用いられている。「1」は５回，「2」と「4」が２回ずつ，「0」「13」「444」は一度だけである。助数詞は，５種あり，「−人」が４回，「−時」が２回繰り返されて，「−回」「−日」「−つ」「−本」が各１回使われている。さらに助数詞なしの「0」が話の最初の部分にある。「一生」も助数詞はないと考える。この話は恐ろしい３つのゲームを説明するもので，それぞれのゲームで，数詞が重要な要素として使われている。即ち，時間は「2」（午前二時），日付は「13」（13日の金曜日）ゲームをする人数は「1」と「4」（一人，四人）である。「1」は，道具の数にも用いられている（一つのテーブル，ローソク一本）。また，「死」を連想させる「4」は「四人」のみならず三桁の「444回」としても用いられている。

(16)「夢」(37話)『夢の前兆』(久保　1997:228-229)

当時私は東京の下町の知人宅に下宿していました。そこは大家族でわたしを入れて七人の人間が暮らしていたのですが，女の人達はみんなどこか変わっていました。どの人もよく夢を見るらしく，いつもその話をします。…（略）特にSちゃんは私に真顔で，「あなたのお父さんがセキをしている夢を見た。電話してあげなよ」などという時もありました。まさかと思って家に TEL すると，ふだん病気ひとつしない父がカゼで寝込んでいるというのです。電話口で母が「セキがひどくてね」と言った時は本当にびっくりしました。でも私は偶然だろうと思ってあまり信じていませんでした。自分が実際にあの夢を見てしまうまでは。

その日，私の部屋はリフォーム中で，私は Sちゃんの部屋で一緒に寝ました。そして夢を見たのです。奥さんとだんなさまが向かいあって正座していました。だんなさまは手に日本刀を持っていて，目をつぶると，いきなり自分のおなかを切り裂きました。切腹です。血がふき出しました。奥さんがあわてて，布でだんなさまのおなかをふきます。血の赤さが布に吸い取られてゆきます。よく見ると，切り裂いたはずのおなかには，ぽつんぽつんと二つ丸い穴があいているだけなのです。奥さんは「まぁどうして二つも」と言いました。色も鮮やかなおそろしい夢。私はめざめると，すぐ Sちゃんを起こして夢の話をしました。Sちゃんは「えっほんと？」と顔をくもらせ，奥さんに話しをしに行きました。実はその時，だんなさまは肝臓の検査のため，入院を予定したのです。私は何も知りませんでしたが……。二日後，だんなさまの検査の日，病院から戻った奥さんが笑って言いました。「検査で肝臓の組織を取るのにね，おなかに穴をあけたの。二か所。二つもあると思ってなかったからびっくりしちゃったけど」と。びっくりしたのは私の方でした。

この話は，長さの割には数詞が少なく，延べ７回のみである。特に前半部分では数詞があまりなかったので，本文８行省略した。３種の数詞「1,2,7」だけが「7-1(neg)-2-2-2-2-2」の順に現れている。助数詞は，「−人」「−つ」「−日」「−箇所」で「−つ」が４回使われている。この話の特徴は，後半から最後にかけて「２」が続けて５回用いられている点である（「二つ」「二つ」「二日」「二カ所」「二つ」）。

(17)「動植物」(64話)『恩返し』(久保　1997:239)

今年の一月，私のうちの犬が死にました。皮ふ

ガンだったので10年しか生きれませんでした。何日か経って私は父に頼まれスピードくじを買いました。そのくじはコインで削って犬が出ていると当たりなんです。四匹出ると一等で10万円もらえるんです。うちに帰って削ってみると四匹でてきました。10万円当たったんです。偶然かもしれないけど，うちの家族はみんな恩返しだと思っています。

「動植物」という分類には64話あるが，全般的に数詞があまり使われていない。その中で，(17)は，４種の数詞「1」「4」「10」「10万」が延べ７回用いられている。「1,4,10,10万」が「1-10-4-1-10万-4-10万」の順に現れている。助数詞は，「−月」「−年」「−日」「−匹」「−等」「−円」である。「1」と「4」は２回，「10」は1回だが，「10万([dʒɯɯ-maN])」は２回繰り返されているので，[dʒɯɯ]という音は計３回ある。この話では「10」と「4」が交互に用いられ，「死」を連想する「4」と当たりくじの「4匹」は，発音がそれぞれ[si]と[joN]と異なっているが，概念では同じだと認識されるだろうし，また「10年」で死んだ犬と，一等の「10万円」のくじが，桁が異なるが[dʒɯɯ]という音を共有しているので，「犬」と「くじ」の関係性が数詞によって二重に結ばれていると想像できる。

(18)「ことば」(66話)『肩たたき』(久保　1997:250)

ある人から聞いた話です。部屋の四隅に一人ずつ立って順番を決めてから隅まで真っ直ぐに歩いて，次の人の所に着いたら肩を叩いていきます。三番の人が四番の人の所について，四番の人が一番の人の所に着いた時で終わりなのですが，そのままだまっていると一人増えて四番の人が動いていないのに一番の人の肩が叩かれるそうです。

(18)は「ことば」という分類の中から選んだものであるが，総数66話ある内，半数以上が非常に短い話である。従って，数詞が最も多いと思われるこの話でも，３種の数詞「1」「3」「4」が延べ９回だけ用いられている。「1,3,4」だけで，なぜか「2」が使われていない点が不思議ではあるが，「4-1-3-4-4-1-1-4-1」の順に現れる。助数詞は「−隅」「−人」と「−番」だけである。また「1」と「4」は４回繰り返されているが「3」は一度だけ用いられている。この話では，「死」の連想がある数詞「4」を利用して，噂話としての不思議さを巧みに表現している。即ち，「四隅」で４人で行われる肩叩きという遊びで，「4番」の人が動いていないのに，次の「1番」の人が肩を叩かれることがあり，一人誰かがそのゲームに参加するらしく，「４=死」の連想から，幽霊の存在をほのめかす内容である。「1」と「4」が反義的対立を表していると解釈することもできる。

3.2　14話全体に見られる特徴

3.1では，14の場所や事物に分類されている話で，数詞が最も多く用いられている話を各分類で１話ずつ選び，テキストの中で，数詞がどのような役割を担っているかを理解しようと試みた。具体的には，14話で，数詞に関して，種類，延べ数，現れる順に注目し，助数詞なども観察し，各話での数詞の特徴を探った。

数詞が多い現代民話14話(5)～(18)から見出された主な結果を述べることにする。まず，数詞出現数の延べ数は７～19回であり，７回が３話，９回が１話，11回が２話，12回が４話，13回が２話，15と19回が１話であった。次に，数詞の種類は，２種類～６種類であり，２種類が１話，３種類が３話，４種類が２話，５種類が３話，６種類が最多の５話に用いられていた。その内の多くが一桁で，14話すべてに「1」が見つかった。その他の一桁は，1～7だけで，「8」と「9」はなかった。二桁は，10種類あり，三桁以上は，「444」と「10万」であった。14話すべてに共通している特徴は，同じ数詞が２度以上使用されていたことである。特に「1」は14話中12話で少なくとも２度出現していた。一番多いのは，(8)で，「1」が11回用いられている。次は，(7)で「3」が8回，その後，(6)(14)では「1」の７回が続く。特定の数詞が繰

り返されるという点が全話に見られたことは意義深く，数詞が多数用いられている話には，特定の数が，２度以上使われる可能性が高いと推測できるかもしれない。最後の特徴として助数詞について言えることは，「−人」が14話中12話で見つかったことである。特に，(8)は，19の数詞のうち15に，また(10)は，話の中の13数詞すべてに「−人」が付加している。

4.　日本語の[数詞+助数詞]と英語表現

この節では，日本語の数詞が，英語ではいかに表現されているかを把握するため，4.1では，日本の昔話とその英語訳を参考に違いに焦点を当てる。3.1で「数詞＋助数詞」が代名詞としての働きをすることを観察したが，それについても確認する。4.2では，北原白秋が英語のマザーグースを訳した際，数詞に関連する修正をしたことに言及する。

4.1　英語の表現との比較

日本語では，数詞は多くの場合，助数詞が付加されるが，語りに於いては，[数詞+助数詞「−人」]が代名詞としての働きをしていることを観察した。ここでは，[数詞+助数詞]を多く含む日本文と英語訳との表現を比較する。

川内(編)（1997,2001）[7]の英語対訳の日本昔ばなしを参考に，日本語の数詞が英語でいかに表現されているか見ることにする。最初に，「わらしべ長者」(川内(編)，2001:10-27)を扱うことにする。皮肉なことに，英語のタイトル‘The One-Straw Millionaire’には，‘one’が使われている。直訳すると「一本わらの百万長者」となるが，タイトルだけで内容を分かりやすくするために‘one’を入れて，「たった一本の」わらしべであることを強調したと思われる。それでは，日本語の数詞の部分がいかに訳されているかを探るために，以下に関連する部分をあげる。日本語で，数詞と助数詞の部分とそれに対応する英語の部分には下線を施した。

(19)「むかしむかし，あるところに，一人の貧しい男がおりましたとさ。」
‘There once was a very poor man who didn't seem to have any luck at all.’
（川内(編) 2001:10-11）

(20)「わら一本じゃのう。」‘…all I got was one little straw.’(川内(編) 2001:14-15)

(21)「みかんを三つさしだしました。‘…giving him three mikans in return.’(川内(編) 2001:16-17)

(22)「ごおんは一生わすれません。」二人は心から男におれいをいうと，反物をわたして去っていきました。」
‘“I'll never forget your kindness,” she said, smiling at him as she and the elderly man went on their way.’(川内(編) 2001:18, 21)

(23)「ははーん，わら一本がみかんになって，そのみかん三つが絹三反もなった。」
“Well, I'll be. A straw became three mikans, and they became three rolls of silk!”
(川内(編) 2001:20-21)

(19)では，「一人の」が‘a’で表されている。(20)の「わら一本」は，英語では，助数詞なしで，‘one little straw’である。(21)「みかんを三つ」も「つ」に相当する英語がないので，‘three mikans’である。(22)では，「一生〜しません」を‘never’で，「二人」は代名詞として使われているので，英語では，‘she and the elderly man’と訳されている。(23)の「わら一本」は「本」に相当する英語がないので，‘a straw’，「(その) みかん三つ」は，代名詞として‘they’と訳され，「絹三反」は英語でも「反」に相当する‘roll’とともに‘three rolls of silk’と表現されている。

次に，「古屋の森」(英語のタイトル：‘The Ramshacke Leak’)での数詞を考える。話の始まりの部分(川内(編)，2001:64-67)の日本語テキスト

と英訳を比べてみよう。

(24) むかし，ある山里に，古い一けんの農家がありましたそうな。古ぼけた小さないえには，おじいさんとおばあさん，それに小さな孫と，たいそうりっぱな馬が一頭飼われておりました。ところで，ある日一，この馬を盗もうと狙っている，一人のどろぼうがおりました。このどろぼう，人相は悪いけれど，走り方もかくれ方も，自分ではかっこいい……，ひょっとすると，日本一のどろぼうではないかと，考えていたのです。

Once upon a time, in some hills far out in the country, there stood a rickety old farmhouse. An old man and woman lived in this house with their little grandson. And under the same roof, in a stable with a dirt floor, they kept a beautiful, healthy young horse.

It so happened that one rainy night, a burglar came along intending to steal that horse. This burglar was a nasty-looking fellow, but he fancied himself quite dashing and clever —possibly even the greatest burglar in all Japan.

上の日本語テキストには，「一軒」「一頭」「一人」「日本一」と数詞が４回使われている。この内，「古い一軒の農家」は，‘a rickety old farmhouse’，「たいそう立派な馬が一頭」は‘a beautiful, healthy young horse’，「一人のどろぼう」は‘a burglar’であり，「一軒」「一頭」「一人」全てが，‘a’で表されている。日本語では「1」に意味のある助数詞「−軒」「−頭」「−人」が付加し，数だけの情報を与える英語に比べて，量的だけでなく質的な情報も含むので，テキストに於いての存在感が重い印象を与える。そのため，[数詞+助数詞]が日本語のテキストでは，頻繁に用いられるのではないだろうか。さらに日本語では，最上級「日本一のどろぼう」は，‘the greatest burglar in all Japan’と最上級‘the …est’で表現され，数詞は使われていない。[8)]

次に，「七夕さま」(川内(編)，1997:66-85)という話から最後の部分を取り上げ，日本文と英文訳を対比してみよう。「みけらん」という下界の若者と「七夕」という天女の話である。以下で明らかになるが，英語訳は，和文の逐語訳でなく，和文の順序を変えて，意味を表現している。その上，かなり意訳されている部分もある。「七夕さま」を要約すると次のようになる。みけらんは，天女の羽衣を隠して，天に帰れないようにして，天女と仲良い夫婦として暮らす。数年後，天女が羽衣を見つけてしまい，天に戻ることになる。七夕は，わらじを千足編んで竹の下に埋めれば，また会えると言って去る。みけらんは，わらじを千足編んで竹の子の周りに埋めると，空高く竹が伸びたので，登り始める。しかし九百九十九足しかなかったので，たどり着けなかった。そこで，七夕が手を伸ばし，みけらんを雲の上へ引き上げ，二人は会えて喜んだ。一方，七夕の父親は，娘が下界のものと結婚したことが許せないため，みけらんに難題を出し困らせる。まず，三日のうちに畑に種を蒔くようにいう。みけらんは，一生懸命蒔き終わったが，父親は，こちらでなく向こうに蒔くように言ったと困らせる。そこで，七夕が，鳩に頼んで，種を蒔いてもらう。次に，父親は，三日三晩，瓜畑の番をするように言いつける。七夕は，みけらんに喉が乾いても瓜を食べてはいけないと言う。しかし，みけらんは，我慢できずに瓜を食べてしまう。この後が，(25)の日本文と英語の訳になる。

(25) …すると，あっというまに，うりの中から水があふれ出て，ごうごうと流れはじめました。「みけらーん！」「たなばたーっ！」二人の間は，みるみる引きはなされてしまいました。こうして，川をはさんで向かいあう二人のすがたが，牽牛星と織女星になったのです。二人は，一年に一度，親父様のゆるしをえて，七夕の日にだけあうことがきるのだそうです。いまでも二つの星は，天の川をは

さんで，美しくかがやいています。

A great torrent of water came gushing out of the melon. And in the twinkling of an eye the torrent became a raging river. Mikeran was swept off his feet, and the powerful current carried him to the far side of the Valley of Heaven.

"Mikera-a-an!"

"Tanabata-a-a!"

To this day, Tanabata and Mikeran sit on opposite banks of the river we call the Milky Way. You can see them each night gazing helplessly across at each other, waiting for the one day in the year her father allows them to meet. (川内(編) 1997: 82-83)

上のテキストで，数詞について，日本語と英語を比べると，容易に気づく相違点は，日本語テキストに，「二」が４回見つかるが，英語では‘two’が全くないことである。それはどうしてなのだろうか。まず，上の文で，日本語の[数詞+助数詞]は，「二人」「二人」「二人」「一年」「一度」「二つ」が見られる。どのように英訳されているのか一つずつ見てみよう。最初の「二人の間は…」は，‘Mikeran was swept off his feet(みけらんは，足をすくわれて流された)’と意訳されている。次の，「二人のすがた…」は，Tanabata and Mikeran と二人の名前で表され，「二人は」と「二つの星」は，代名詞の‘them’で一度に表現されている。「一年に一度」は，‘the one day in the year’と訳され，‘one’が一度使われている。換言すると，日本語テキストの数詞は延べ６回使われているが，英語テキストでは，１回だけであり，日本語は英語よりが数詞の出現率がはるかに高いことが明らかである。即ち，日本語の文章では，[数詞+助数詞]の役割が重要で，強い印象を与える一方で，英文では，数詞は積極的に用いられていないため，日本語のような印象を与えることはないと理解して良いだろう。

4.2　北原白秋の訳詩

平野(1974:14-29)によると，北原白秋は，『まざあ・ぐうす』の訳詞にかなり情熱を傾けていた。平野は，白秋の訳詞は明治以降の訳詩集の中で優れていると主張しているが，一般的には，冷遇されているようであると述べている。本稿と関わりのある白秋の訳詞は「胡桃」であり，『赤い鳥』に最初に発表された。後に，細心に修正され，改訳された訳詞は，旧訳より引き締まっていると平野は指摘している。それでは，最初に「胡桃」のオリジナルの英語を見てみよう。

(26)　There was a little green house,
And in the little green house
There was a little brown house,
And in the little brown house
There was a little yellow house,
And in the little yellow house
There was a little white house,
And in the little white house
There was a little heart. (平野1974:12)

次は，白秋が(26)の英語を最初に訳し，鈴木三重吉の創刊した『赤い鳥』(1920)１月号に載せたものである。

(27)　小さな緑のお家があって，
小さな緑のお家の中に，
小さな金茶のお家があって，
小さな金茶のお家の中に，
小さな黄色いお家があって，
小さな黄色いお家の中に，
小さな白(しろ)いお家があって，
小さな白いお家の中に，
小さな心がただ一つ，
ただ一つ。　(平野1974:11-12)

翌年，1921年に『まざあ・ぐうす』として出版した本には，次のように改訳されている。上の「お

家があって」を「お家がひとつ」に変え，奇数行に「ひとつ」が必ず現れるように工夫したことが分かる。

(28)　小さな緑のお家がひとつ。
　　小さな緑のお家の中に，
　　小さな金茶のお家がひとつ。
　　小さな金茶のお家の中に，
　　小さな黄色いお家がひとつ。
　　小さな黄色いお家の中に，
　　小さな白(しイろ)いお家がひとつ。
　　小さな白いお家の中に，
　　小さな心(ハアト)がただひィとつ。(平野1974:14-15)

上から分かるように，最初の訳詞では，最後の行の‘a little heart’の‘a’だけ「一つ」と訳し，「ただ」を付け足して「一つ」の意味を強調し，さらに「ただ一つ」を反復させていた。ところが，改訳では，最後の部分の反復をやめ，英語の全ての‘a little … house’に対応する‘a’を「ひとつ」と訳すことにしたのである。「ひとつ」は，英語にはない[数詞+助数詞]という日本語独特の表現であり，(28)は (27)にはないリズム感も生まれている。また，白秋が‘a little … house’に対応する‘a’を「一軒」と訳さず「ひとつ」としたことに注目しよう。最後の‘a little heart’の訳は「心がひとつ」と助数詞が「−つ」であるため，家を「一軒」とせずに，「−つ」にすることで，詩全体で，「ひとつ」を５回繰り返すことになり，自然にリズムを作り出すことに成功していると考えられる。

5.　結論

本稿は，現代民話と呼ばれる女子高生の語りで数詞が如何に効果的に使われているかについて考察した。久保(1998)を資料として，数詞の用法を詳細に観察した。２節では，清海(2016b)で取り上げた「学校の怪談」の数詞用法を確認するために，久保(1998)の資料から４話を紹介した。３節で同資料の他の不思議な話で14分類された場所や事物に関する話の中，数詞が最も多く用いられている話を１話ずつ全部で14話を調査した。具体的には，数詞の種類，数詞の現れる順，助数詞を考慮に入れて，役割を探った。その結果，数詞出現数の延べ数は７〜19回であり，数詞の種類は，2種類〜6種類であった。数詞は，多くが一桁で，14話すべてに「1」が見つかった。その他の一桁は，1〜7だけで，二桁は，10種類あり，三桁以上は，２種だけであった。14話に共通していた点は，同じ数詞が２度以上使用されていたことで，特に「1」は14話中12話で少なくとも２度出現していた。一番多い話では，「1」が11回も用いられていた。全話で特定の数詞が繰り返されているということは意義深い特徴である。助数詞については，「−人」が14話中12話で見つかり，人を数詞で表す頻度が多いことを示唆している。実際に，[数詞+人]が代名詞としてしばしば使われている例を見た。４節では，日本語の[数詞+助数詞]が，英語ではいかに表現されているかを対訳本で調査し，違いを確認した。日本語のテキストでは，[数詞+助数詞]が積極的に用いられ，強い印象を与える一方で，英文では，数詞は控えめに用いられて，日本語のような印象は与えてはいないことが明らかにされた。さらに，北原白秋のマザーグースの訳詞にも言及し，[数詞+助数詞]を用いて訳すことにより，日本語でのリズムを巧みに生み出していることが分かった。結論としては，女子高生が語る「不思議な話」の数詞の用法には，伝承に役立つような工夫が多く見られた。従って，現代民話の伝承に於いて，数詞が重要な役割を果たしていると推測することは妥当であろう。

注

1)　宮地(1972)では，「数詞」が，「数」+「助数詞」から成立すると考えられている。同様に，松本(2006)では，助数詞の付加された「数詞」と助数詞を伴わない「数」に区別されている。本稿では，基本的には，助数詞に伴われる数を扱うが，助数詞のない数だけを扱うことが

あり，「数詞」と「数」という語の厳密な区別はしていない。

2) 清海（2015,2016a)では，稲田・稲田（編）(2003)『日本昔話百選（改訂新版)』をデータとして，日本民話での数詞の用法の傾向について調査した。100話全体にかんする数詞の出現率を考察した結果，データの９割以上で「数」が使用され，特に「1」「2」「3」の頻度が高く，「1」は，データ全体で８割以上にあることが分かった。また{1,2,3}までの結び付きは，ある程度保持される一方で，{1,2,3,4}以上は，連続性が保たれにくい傾向が示された。

3) 日本語の助数詞については，清水(1999)を参照のこと。

4) 久保(1997:37)では「合って」となっているが，誤りと判断し「遭って」に変えた。

5) ４節では，対訳本で，日本昔話を日本語テキストとその英語訳で比較する。

6) 「一生」は，「生まれてから死ぬまでの間。終生」(『広辞苑 第六版』)という意味で，具体的な数の概念を想起させるとは言い難いが，生まれてから死ぬまでは一度だけであるという含意と，「一生」([iʃʃoo])と「1」([itʃi])の最初の母音が同じであるという理由から，「一生」と「1」の関連性を認めた。

7) 川内(編)（1997,2001)『まんが日本昔ばなし』『まんが日本昔ばなし・愉快な話』の題名には「まんが」とあるが，挿絵に漫画が多く使われているだけで，基本的には，左ページに日本語の本文，右ページにはその部分が英語に翻訳された所謂対訳本である。

8) 英語にも‘number one’は一番という意味があり，形容詞的にも用いる。『ランダムハウス英和大辞典』(第２版)によると，話し言葉ではあるが，‘number one’の2番目の意味には，次の二種類がある：(1)（地位・順序・順位などで）一番めの人[もの，グループ]，第一の，一番の：例）‘Our team is number one’「我々のチームが一位だ」(2)最上級[最上等]の（もの，こと，人）第一級の，一流の：例）‘A number one performance「一流の演技」。

参考文献

一柳廣孝（編）　2005.　『「学校の怪談」はささやく』　青弓社，東京.

稲田浩二・稲田和子（編）　2003.　『日本昔話百選（改訂新版)』　三省堂，東京.

稲田浩二・稲田和子（編）　2010.　『日本昔話ハンドブック新版』　三省堂，東京.

川内彩友美（編）　1997(2006[16])　『まんが日本昔ばなし: Once Upon a Time in Japan』(講談社バイリンガル・ブックス)，ラルフ・マッカーシー（訳)，講談社インターナショナル，東京.

川内彩友美（編）　2001(2008[7]).　『まんが日本昔ばなし・愉快なお話: Once Upon a Time in JOLLY Japan』　(講談社バイリンガル・ブックス)，ラルフ・マッカーシー（訳)，講談社インターナショナル，東京.

清海節子　2015.　「民話における数の種類と役割（1）-先行研究と日本民話に於ける数の用法」『駿河台大学論叢』50:45-78.

清海節子　2016a.　「民話における数の種類と役割（2）-日本民話にみられる「数」の組合わせと伝承機能としての役割」『駿河台大学論叢』52:67-81.

清海節子　2016b.　「『学校の怪談』に現れる数詞の役割-世間話と民話との比較から数詞を検証する」『駿河台大学論叢』53:33-49.

久保孝夫　1997.　『女子高生が語る不思議な話』青森県文芸協会出版，青森.

清水康行　1999.　「日本語の数表現」『言語』28(10)：42-47.

高木史人　2005.　「怪談の階段」　一柳廣孝（編）197-246.

常光徹　1993.　『学校の怪談 ― 口承文芸の展開と諸相』ミネルバ書房，京都.

平野敬一　1972(2010[46]).『マザー・グースの唄』

中公新書275，中央公論新社，東京.
松谷みよ子　1987(1995[4]).　『現代民話考７− 学校 ほか − 』　立風書房，東京.
松本克己　2006.　『世界言語への視座』　三省堂，東京.
宮地敦子　1972(1981[2]).　「数詞の諸問題」　鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別 日本文法講座 2：名詞・代名詞』56-78，明治書院，東京.
山田厳子　2005.　「「社交」と「ふるまい」− 学校という舞台 −」　一柳廣孝（編）　135-165.

辞典

『広辞苑 第六版』（電子版）　新村出（編）　2008.　岩波書店.
『ランダムハウス英和大辞典』　第２版（電子版）　小学館ランダムハウス英和大辞典第２版編集委員会（編）　1973，1994.　小学館.